

平成 30年 2月 16日	
資 料 提 供	
担当課(室)	県立博物館
担当班・係	学芸課
担 当 者	主査学芸員 大河内
電 話	073-436-8684 (学芸課)

## すさみ町・持宝寺へのお身代わり仏像の奉納について

和歌山県立博物館では、和歌山県立和歌山工業高等学校、和歌山大学教育学部の協力を得て、3Dプリンターを用いた文化財の精巧な複製を制作し、文化財の防犯対策・防災対策を行っています。

高齢化や人口減少などの要因により、管理や保全が困難になっている地域の寺社等にある文化財や、津波被害等の危険性のある文化財を博物館等で保管し、かつ、信仰されてきた環境も従来通り維持するための取り組みで、平成24年度から29年度までに、県内11か所の寺社に22体の複製を安置しています。

このたび、4月より制作しておりました、すさみ町周参見の持宝寺の本尊である阿弥陀三尊像(南北朝時代)の「お身代わり仏像」を、下記日程にて奉納することとなりましたので、お知らせします。

現地には制作に携わった県立和歌山工業高等学校産業デザイン科の生徒と、アクリル絵の具による着色作業を行った和歌山大学教育学部美術専攻の学生が訪れ、新たに制作した「お身代わり仏像」を持宝寺にお渡しします。当日は、実物と「お身代わり仏像」の両方を堂内に安置します。阿弥陀三尊像の詳細情報については別添資料をご参照下さい。

なお、今回の奉納は、生徒・学生が地域の方々と交流を行うことで学びをより充実したものにするとともに、住民の方々が「お身代わり仏像」を身近に感じていただく機会とすることを目的としています。



持宝寺 阿弥陀三尊像(実物)

日 時 平成30年(2018) 2月27日(火) 11:00～12:30(予定)

(高校生・大学生の現地到着は、交通事情等で時間が若干前後する可能性があります)

場 所 持宝寺 (西牟婁郡すさみ町周参見3553)

※寺には駐車場があります。当日は係の方の誘導に従って駐車して下さい。

参加者 持宝寺の檀家の皆様・県立和歌山工業高等学校産業デザイン科の生徒及び教員  
和歌山大学教育学部美術専攻の学生・和歌山県立博物館学芸員 ほか

内 容 持宝寺阿弥陀三尊像(実物)の修理完成披露およびお身代わり仏像の奉納と、開眼供養法要  
※法要前に、阿弥陀三尊像の文化財的価値とお身代わり仏像の制作について説明します。  
※法要後に、檀家・地域住民のみなさんに仏像を間近にご覧いただき、生徒・学生と交流します。

連絡先 主査学芸員 大河内智之 (当日連絡先:090-9546-6094)

持宝寺 0739-55-2764 (奥田良哉住職)

※仏像複製の制作は文化庁「平成29年度地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」の成果によるものです。

# すさみ町持宝寺の阿弥陀三尊像について

像 高 阿弥陀如来立像79.4cm・観音菩薩立像46.6cm・勢至菩薩立像46.3cm

## かたちと構造

持宝寺(西牟婁郡すさみ町周参見)本尊像。阿弥陀如来立像は肉髻相・螺髪をあらわし、衲衣、覆肩衣、裙をまわって直立する。左手は垂下、右手は屈臂して、それぞれ掌を前にして第1・2指を捻じる。観音菩薩立像と勢至菩薩立像は、ともに髻を高く結び、天冠台をあらわして、条帛、裙、天衣をまわって腰をやや屈めて立ち、観音菩薩は蓮台を両手で捧げ、勢至菩薩は合掌する。

阿弥陀如来像の構造は、頭体通して一材製とし、耳後方を通る線で前後に割り矧ぎ、内削りを施して、頭部を三道下で割り矧ぎ、玉眼を嵌入する。右肩には前後二材と、さらに前膊・袖を含む一材と、袖後方の一材、手先を寄せる。左手は肩半ばから袖先にいたる材と手先を別材製とする。右体側に腹部から裙裾に至る一材と、左裙裾に一材を矧ぎ寄せる。両耳、鼻先を別材製とする(当初仕様であるか後世の改造かは不明。ただし耳・鼻とも後補)。観音菩薩像は頭体通して一材製とし、耳後ろを通る線で前後に割り矧ぎ、内削りを施して、三道下で割首する。頭部材については、さらに耳前で薄く割り矧ぎ、前後三材の体をなす。玉眼嵌入。髻を別材製とする。両手ともに上膊・前膊・手先・蓮台を別材製とし、両足先も別材製とする。面部では右耳を別材製とする(当初仕様とみられる)。勢至菩薩像も観音菩薩像と同様の構造で、耳と鼻を別材製とする(耳材亡失、鼻先材後補)。3軀とも像表面は錆地を施し漆箔仕上げとし、現状はほぼ素地を呈する。台座は江戸時代の後補。

## 像内から発見された銘文と仏師 浄慶

平成26年(2014)から行われた修理において、阿弥陀如来立像の像内に「為當来作仏奉造立之 延元々年八月時正第七月／大願主僧快尊／仏師浄慶」、観音菩薩立像の像内に「為當来作仏／大願主僧快尊／仏子僧浄慶／結縁者朋鶴女／于時建武四丁丑年／三月三日」の銘記が確認された。延元元年(1336)は南朝年号、建武4年(1337)は北朝年号であるが、阿弥陀如来立像が1336年8月の書き入れ、観音菩薩立像が1337年3月の書き入れで、阿弥陀を先行して造像し、7か月後に脇侍の造像に取りかかったものとなる。

仏師浄慶については、尾鷲市真巖寺の薬師如来坐像を嘉暦元年(1329)に造像しており、また貞和3年(1347)銘を有する那智勝浦町・大泰寺の地藏菩薩坐像とも作風が近く、作者系統を同じくする可能性があり、おそらくは紀南地域を制作圏とする仏師であったとみられる。願主快尊、結縁者朋鶴女については現時点では不詳。

持宝寺及びすさみ町の歴史を物語る重要な資料であり、寺が海拔の低い地域にあって防災及び防犯の点で心配があることから、所蔵者の意向により県立博物館へ寄託し、お身代わり仏像の制作を行った。



左:勢至菩薩立像 中央:阿弥陀如来立像 右:観音菩薩立像